

作物名：水稲

病害虫名：イネミズゾウムシ（学名：*Lissorhoptrus oryzophilus*）



成虫



食害痕

1 被害の状況

(1) 被害の特徴

越冬成虫による本田初期の新葉の食害

- ・田植直後の軟らかいイネの葉に、表皮を残した線状の細長い食痕が断続的にみられる。
- ・密度が低い場合には、畦畔沿いに多く生息する傾向がある。
- ・主に夜間に葉を食害する（日中は根に潜むが、水があると、日中でも葉上にみられる。）

幼虫による根の食害

- ・田植2週間後から、幼虫が土中で根を食害。ひどいと分けつが抑えられ、株は容易に引き抜ける。

(2) 虫の特徴

- ・成虫：体長約3mm。体表面は灰褐色のりん片で覆われ、背面に黒色斑紋、触角は赤褐色の棍棒状。
- ・幼虫：約8mm、乳白色でわん曲する。頭部は黄褐色で、背面に6個の突起がある。

2 生態

単為生殖し、年1回発生。成虫で越冬し、越冬成虫は4月下旬～5月上旬に越冬地（畦畔、雑草地など）付近のイネ科雑草（ネザサ、チガヤ、ススキなど）の新葉を摂食し始め、田植が始まると次々と本田へ侵入する。侵入最盛期は平年では5月末から6月上旬。卵は、水面下の葉鞘組織内に1個ずつばらばらに産み込まれる（1か月以上の間、1～2個/日）。幼虫は、根の内部に潜入し、空洞状に食害する。土まゆは、根に連なる。8月中旬頃に羽化した新成虫は、越冬地へ移動する。発育日数は、卵7日、幼虫30日、蛹7～14日である。

3 発生しやすい条件

- ・稚苗移植や、移植時期が早い...若く軟らかい葉を好んで摂食する。侵入は移植時期が早いほど多い。
- ・低湿田、厩肥多用田...苗の活着が悪いと、幼虫の被害が顕著となる。
- ・山間の水田...周囲に山林があり、越冬場所に恵まれる。

4 防除方法

- (1) 要防除水準：畦畔際2m程度の成虫密度1.3頭/株
- (2) 化学的防除：育苗箱施用剤、水面施用剤（幼虫対象6月上旬、成虫及び幼虫5月末）を適期に使用する。
- (3) 耕種的防除：周辺ほ場に比べて田植えが早いと、成虫の侵入が集中する。田植え時期をできるだけあわせて浅水管理をする。

5 その他（県内での発生推移等）

育苗箱施用剤による防除が普及しており、近年発生はやや少ない傾向にある。

6 出典

- (1) 参考文献：宮城の稲作指導指針（基本編）、原色病害虫診断防除編1（農文協）、農業総覧 病害虫防除・資材編1（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影